1985年5月25日第三種郵便物認可　2015年4月1日発行（毎月1回1日発行）通巻546号

福祉のひろば

4
2015

特集

わかものは　浮かれていない

この春、社会福祉現場に入職する若者へのインタビュー・アンケート掲載

新連載はじまる：全盲夫婦の出会いから二人三脚のあゆみ
「助けて！」って言ってもええねんで！

編集　総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
ＴＥＬ　（０７５）２１１－７２７７
ＦＡＸ　（０７５）２１１－７２７０
http://www.kyoto-archi.co.jp/

2015年3月下旬発刊！

本体 4400 円＋税
（送料込）

光なき者とともに

恂臧・政亮　父子二代の記

第１部　父・恂臧
第２部　小川恂臧先生の思い出
第３部　小川政亮　自伝

“人は教育によって人となる”カントの人間学を実践した小川恂臧・初代浪速少年院院長と、権利としての社会保障を貫いてきた小川父子の二代の記が本になりました。

(有)福祉のひろば

〒543-0055　大阪市天王寺区悲田院町8-12　　TEL・FAX06-6779-4955
E-mail: hiroba@ sosyaken.jp　HP：http://www.sosyaken.jp/ hiroba/

いっぽいっぽの会の挑戦

沖縄で障害者グループホーム開設

――2014年11月スタート

濱川義文（はまかわよしふみ）さん（62歳）は、左官職人だった。季節として、本土で左官とアスベストを交互に働いてきた。職人として一日５万円も稼げる時もあった。40代半ばで、首里（しゅり）市の解体工事で足を痛め、左官としては働けなくなる。いっぽいっぽの会と巡りあって、やっと居場所ができた。園芸の仕事もあって、がんばれる、と。沖縄を象徴するようなケースだった。

自立支援事業に向き合って、多くの方々の命や暮らしに関わってきました。しかし、年々下がる委託費用、４月からはゼロになります。今つながっている人たちをどうするの？NPO法人での期限付き事業や毎年更新される自治体からの委託事業は、人の確保や見通しがもてません。人と金という事業の命綱が、これほど、利用者や事業者を振り回して、憤りさえ覚えます。事業は求められている、しかし、人を採用し、雇用し続ける原資と施設の維持や確保がきびしい。頭を抱えながらも、この面でのいっぽいっぽの挑戦があります。

（写真は、理事会の苦悩の様子）

いっぽいっぽの会の貴重なスタッフのみなさん。前列右端の高木博史（ひろし）さん、後列左の繁澤（はんざわ）多美（たみ）さん（連載執筆者）が共同代表。３名用のグループホームの消防検査も終わり、４月には、合計８名の受け入れ体制が整う。多くの方々の支援をよびかけながら、いっぽいっぽの会の挑戦は続きます。（４月末に、福祉のひろばブックレット③として、いっぽいっぽの会の連載が本になります）

「普天間基地は、その土地の住民を追い出して作った基地。その周辺に、元住民がいつかは帰れる、と思って住んでいる。どうして、追い出して作った基地の代替えが必要か理解できない。普天間も辺野古も両方とも撤退こそ、道理なんだ」と、キャンプシュワブで抗議行動に参加する高齢者は語気を強める。貧困・格差・差別と平和。沖縄問題を考える上で、欠かせない言葉だと一層深めて帰路に就いた。

（写真・文：下野祇園）

福祉のひろば
2015年4月号

【ひろばトーク】
日本はいったいどうなってしまったのか　寺久保　光良　6

●特集●　わかものは　浮かれていない
32人の学生さんにアンケートに答えていただきました　10
社会福祉現場に働く予定者インタビュー
野村有美香、古川友子、塚腰祐貴、井上波希、稲継馨、古田優佳、冨田寛乃　15

●トピックス●
日本の教育費は高すぎる!!　53
この春、新たに社会福祉の現場で働くあなたへ
内山　裕子、湧井　規子、澤村　直　28
社会福祉現場における若手の育成に求められることは？
報告1　介護福祉専門職の現場育成力研究
陳　引弟、黒川　奈緒　35
報告2　社会福祉現場ではたらく20代職員調査　41
アカン！　大阪市の生活保護のプリペイドカード支給
全大阪生活と健康を守る会連合会　46
社会福祉法人制度改革という名の社会福祉・社会保障解体は許せない　48
めざそう、だれもが人間らしく生きられる社会を！　50
埼玉集会に期待しています　東嶌　満　52
福祉のひろば読者のつどい　54
京都社会福祉講座、成功のうちに終了！　廣末　利弥　55

●連載●
フォーラム　福祉労働の専門性と「やりがい」を考える　西浦　哲　58
相談室の窓から　青木　道忠　60
育つ風景　清水　玲子　62
新「助けて！」って言ってもええねんで！
子どもをささえ、負の連鎖を断ち切りたい　徳丸ゆき子　64
新 全盲夫婦の出会いから　二人三脚のあゆみ
ひとり歩きは権利　千田勝夫・絹枝　66
映画案内　『スタンド・バイ・ミー』　吉村　英夫　68
現代の貧困を訪ねて　在日コリアンと野宿者のヘイトクライム　生田　武志　70
なにわ銭湯見聞録(24)　パニック・イン・銭湯　ラッキー植松　72
いただきます！　すみれ共同作業所　74
アレンジして楽しく！あつあつのピザトースト
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　56／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　いっぽいっぽの会の挑戦
沖縄で障害者グループホーム開設――2014年11月スタート

●表紙の絵●
神門やす子

●カット●
川本　浩

ひろばトーク

日本はいったいどうなってしまったのか

第21回社会福祉研究交流集会 in 埼玉実行委員長　**寺久保光良**さん

日本は本当にどうなってしまったのでしょうか？　毎日のように事件や事故、政治家のスキャンダルや政治的事件が続発しています。あまりにも多いので、少し前の事件はすぐに忘れてしまうほどです。

この原稿を書いているいま、イスラム過激派の「イスラム国」に人質になっている湯川さんと後藤さんの安否の心配が現実となりました。日本の首相はどこを向いているのでしょうか？　この事件に関しての発言は必ず「テロとのたたかいは揺るがない」という枕言葉から入ります。「人命優先」からは、はじまらないのです。国民の命は二の次ということでしょうか。

同じことは、沖縄県民に対する姿勢にもあらわれています。沖縄県知事選挙や衆議院選挙で自民党は全敗しました。しかし、首相は沖縄県知事に面会しようともしません。こんな失礼なことはありません。いったいどこに顔を向けているのでしょうか？

国は何のためにある？　国の主人公はだれ？　そんな基本的な問題を考えざるを得ません。それは少子・高齢社会への危機感をあおり、「だから消費税増税だ」「自助・共助・公助だ」「生活保護や年金の切り下げだ」「要支援者の介護保険外しだ」ということともつながっているようです。

「高齢社会」といっても、私のような「団塊の世代」は一足飛びに六七歳になったわけではありません。この年になるまで、六七年かかっているのです。若いときは一生懸命働いてきました。いまさら「年金危機」だから支給額を減らすなんて、チャンチャラおかしいというものです。

てらくぼ　みつよし

『福祉が人を殺すとき――ルポルタージュ・飽食時代の餓死』（1988年、あけび書房）著者。1948年２月埼玉県（旧）大宮市にて生まれ、文字通り下町生まれの下町育ち。日本福祉大学Ⅱ部卒業。医療ケースワーカー、生活保護ケースワーカー、高知女子大学。山梨県立大学教員などをつとめる。現在、生活保護基準引き下げ反対埼玉連絡会代表、全国生存権裁判を支援する会幹事など。

「少子化問題」はどうでしょうか。「核家族化」が少子化の要因の一つに挙げられていますが、「核家族化」は高度経済成長政策の中ではじまっており、もう五〇年もたっています。その時代には、夫婦共働きでなければ生活できないため「ポストの数ほど保育所を」という住民運動により、保育所の増設、充実が図られました。合計特殊出生率は二〇〇五年に一・二六になっています。その後、多少上がっていますがほとんど変わりません。それは、基本的な子育ての条件が良くなっていないということです。いや、むしろ悪くなっているともいえるでしょう。いま、保育所に民間企業の参入が進められています。企業の目的は利潤追求ですから、保育士の賃金などの労働条件を低く抑えたり、利用者の負担を強めたりします。これでは、保育の充実など望むべくもありません。また、夫の育児休暇の取得促進など、社会全体の産休や育児休暇の充実と保障が欠かせませんが、果たして可能なのでしょうか？

言いたいこと、腹の立つことは正直言ってキリがありません。さて、何をどうしたらいいのでしょうか？　端的に言います。いまの状況は、日本の民主主義の状態、水準の反映ではないかと思います。民主主義をどう作り上げるかは困難なこともありますが、むずかしいことではありません。日本は国民主権だ、ということを声にし、拡散し、日々の生活や仕事の中で切実な困ったこと、こうしてほしいこと、より良くなることなどを、最初は小さな声でもいいから、声に出し、仲間を増やすことが出発ではないでしょうか。民主主義は民（たみ）の主権主義なのです。

特集

わかものは　浮かれていない

（社会福祉現場に働く予定者インタビュー、アンケート調査より）

二〇一五年度、引き続き、月刊誌「福祉のひろば」を購読いただき、ありがとうございます。あらたに購読をはじめていただきました読者のみなさま、ありがとうございます。最初にお礼を申し上げます。

さて、今回の四月号特集　〝**わかものは　浮かれていない**〟　このことばは、本誌の編集室会議で話された、学生たちの生活事例から出たことばです。今回の特集とトピックスでは、春からあらたに社会福祉現場で働く予定の方々に、事前にアンケートや聞き取り調査を行いました。その内容や特徴を紹介します。トピックスでは、学生生活を支えている経済背景などの面接調査を行いました。この二つのインタビューや調査にご協力いただいたみなさん、またインタビューやアンケート調査を受けていただいたわかものたちに感謝します。

〝兎角（とかく）に人の世は住みにくい〟という夏目漱石の『草枕（くさまくら）』の一節があります。日本の現在の政府・国家は、ともすれば、そこで生きていくのは、暮らしていくのは、あくまで自己責任という新自由主義的発想です。今年は戦後七〇年。憲法を暮らしに生かすという民主化運動とは逆に、結党以来、憲法改定を旗印（はたじるし）にしてきた自民党が、その結党の目的を果たす時期、と安倍政権は開き直っています。この戦後の七〇年の歴史的な変遷、とくに教育におけ